

「バルセロナ民族学博物館」の 「セラ・コレクション」とその背景

Etnològic de Museu Barcelona and Sella Collection

朝岡康二

- ①はじめに
- ②バルセロナの公立美術館・博物館
- ③バルセロナ民族学博物館とそのコレクション
- ④セラはどのようにして日本資料を収集したか
- ⑤エウダルド・セラ・グエルという人物
- ⑥おわりに



本稿はスペイン・バルセロナにおける公的な博物館群の社会的な位置付けやその表象機能を紹介するとともに、これらの博物館群のひとつを構成するバルセロナ民族学博物館の特徴を示し、同時に、そこに収蔵されている日本関係コレクションの持つ意味の検討を行ったものである。

同博物館の日本関係コレクションは、収集を行ったエウドロード・セラ・グエルの名を借りて、ここでは仮に「セラ・コレクション」と称することにする。

同コレクションは決して古いものではなく、1960年代のいわゆる民芸ブームの中で収集された民芸品（あるいは観光記念品）であり、美術的な価値という点から評価するならば、貴重であるとは、必ずしも言い難いものである。しかし、見方を変えるならば、戦後の観光文化（なかでも地方都市の文化表象としての）を具体的に示すものとして興味深い資料であるし、また、当時のヨーロッパの一般的な観点からの「日本文化」であると言う点から言えば、また別の意味を導き出すことができる。近年のヨーロッパにおける大衆的な日本ブームと繋がるものだからである。

さらに、このコレクションを集めた意図・過程・集めた人物などを検証していくと、その成立の背後に戦後のバルセロナのブルジュワと芸術家の集団があることがわかり、その持つ意味を知ることができると、あるいは、明治・大正・昭和に跨るヨーロッパと日本を繋ぐ複雑な人的関係の一端も明らかにすることができます。そのキーパーソンがエウドロード・セラ・グエルなのである。

本稿においてこれらの諸点が充分に解明されたというわけではない。いわば手掛かりを得たに過ぎないのであるが、それでも、次の点を知ることができた。

それは、バルセロナにおけるセラを中心とする広範な人的関係に加えて、セラと日本を結ぶ（したがって、「セラ・コレクション」の背景となる）人的関係に、住友財閥の二代目総理事であった伊庭貞剛の一族がおり、「セラ・コレクション」はこの一族の広範な海外交渉史的一面を示すものもある、ということである。